

# 神戸中学の英語教育に関する研究

— 日本人・外国人英語教師に焦点を当てて —

保 坂 芳 男

English Education  
in Kobe Middle School before WWII:  
With a focus on Japanese and Native English Teachers

Yoshio HOSAKA

## Abstract

I have been investigating English education in middle schools in Japan focusing on native English teachers (Hosaka, 2012, 2017).

This paper focuses on Japanese and native English teachers at Kobe middle school. English education in Kobe was highly appreciated by Soseki NATSUME.

There were only two principals in Kobe middle school: Kumeichi TSURUSAKI and Tasuke IKEDA before WWII. It goes without saying that they formed the foundation of education in Kobe middle school, including that of English education.

Mr. Tsurusaki decided to hire a native teacher of English to improve the quality of English education not only for the purpose of entrance exam preparations but also for its practical use.

Mr. Ikeda was a Christian and started a Bible study club and continued English education even during wartime (1941-1945).

Many young Japanese teachers of English started to work very hard there to make Kobe middle school prestigious for high school entrance exams. Also many young native teachers of English did the same and later went on to work at many other middle schools or universities.

**キーワード**：神戸中学，日本人英語教師，外国人英語教師，英語教育史，野球とサッカー

## 1. はじめに

神戸中学<sup>①</sup>は、戦前の西日本を代表する旧制中学の一つであった。卒業生は井深大 (1908～1997)、白洲次郎 (1902～1985)、小松左京 (1931～2011)、高島忠夫 (1930～2019) など多彩で、英語関係では通訳の神様、國弘正雄 (1930～2014) も卒業生である。

神戸中学の教育、特に英語教育に関しては夏目漱石が高く評価していた。彼が一高の教師をしていたころ、英語をスラスラ読むと「君は横浜か神戸の中学か」（『神奈川の百年』下巻、p.98）と聞いたものだという。

本研究では戦前の有数の進学校として評価が高かった神戸中学の英語教育の実態を明らかにしたいと考えている。

## 2. 神戸中学の創立

神戸中学の創立は明治29年である。それは関西の他の名門中学である京都中学（創立明治3年）や北野中学（創立明治6年）と比べて遅い。兵庫県特有の事情からである。

### （1）明治初期の兵庫県の教育事情

明治5年に学制が公布された。これは主に小学校や師範学校の整備が中心であった。学制が規定している中学校が創立されたとしても正則に近いものは極めて少なく変則の場合が多かった。また適当な教科書がなかったり有資格の教師がいなかったりで、中学とは名ばかりで貧弱なものが多かった。財政的な問題で中学を特設せずに師範学校内に中学をおく例も増加していた。（『日本近代教育史事典』、p.99）

兵庫県においても事情は同じで、明治初年の中学校はほとんどなりたたなかった。新兵庫県（第三次兵庫県）の県令盛岡昌純は、とくに中学校の必要を強調し、その設立に官費補助を約束した。さらに区郡連合会などを通じて中学校の設立を奨励した。明治11年4月まず神戸・兵庫両区で神戸中学が設立されるが、しばらくして区の校費支弁が困難になり、翌12年9月に早くも廃校した。（『兵庫県百年史』、pp.226-227）

その後、13年7月、再び神戸師範学校内に模範中学校が設立されるが、16年5月に廃止となった。当時の中学校の多くが廃絶の運命にあたったことは、その財政的基盤が薄弱であり、また一般世人が中等教育に対して無関心であったためと推測される。（『兵庫県教育史』、p.91）

明治19年初代文部大臣森有礼が中学校令を公布した。

兵庫県においても播磨十四郡組合立姫路中学校をそのまま、県立中学校にきりかえることにした。これが明治20年5月1日開校の兵庫県尋常中学校（後の姫路西高等学校）である。尋常中学校が神戸ではなくて姫路に設置された理由は、「都市化されていない姫路の方が学業に適している」（『神戸高校百年史——学校編』<sup>(2)</sup>、p.17）という県会の意見もあったようだが明確ではない。

その後、明治24年の改正中学校令によって「土地ノ状況ニ依リ、文部大臣ノ許可ヲ得テ数校ヲ設立」することができるようになった。そこで兵庫県においても、明治29

年、神戸・豊岡、翌30年、竜野・洲本・柏原、さらに35年、小野・伊丹の各中学校が続々と設立された。（『兵庫県教育史』、p.260）

以上の経緯から現在の神戸高校はその起源を明治29年としている。

### 3. 二人の校長

戦前の神戸中学の初代校長鶴崎久米一が在任27年3か月、二代校長池田多助が在任21年8か月の勤務である。管見の限り東京府立四中の深井鑑一郎校長の在任40年、札幌中学の山田幸太郎校長の在任30年に次ぐ記録であろう。しかも戦前の旧制中学の校長が二人だけであった神戸中学は極めて珍しい例ではなからうか。従ってこの二人が戦前の神戸中学の教育の基礎を作ったと言っても過言ではなからう。

#### (1) 鶴崎久米一（1851～1942）

鶴崎の経歴が『学校編』に残されている（資料1）。それによると鶴崎は札幌農学校の第二期生である。太田稲造や宮部金吾、内村鑑三らと同期である。彼の校長としての学校経営には札幌農学校の影響が強く見られる。

##### ① 外国人教師の招聘

外国人教師を最初に招聘したのは鶴崎校長である。

神戸中学の外国人教師については、『神戸又新日報』1902年2月24日付けに鶴崎校長の談話がある。それは、英語科教師に外国人を雇い入れたい希望をもっていたが、経費の都合で実現に至らず、1902年4月に、来日したアメリカ人を雇い入れることになり、手続き中とのことである。（『学校編』、p.54）

ただ最初の外国人教師 R. J. Inglott が赴任したのは1903年である。しかも彼はイギリス人であるから上記の『神戸又新日報』の記事は別人のことかもしれない。いずれにしても最初の外国人教師 Inglott を雇用したのは鶴崎校長である。

##### ② 生徒の自治の尊重

1905年の創立10周年を前に、鶴崎は「質素・剛健・自重・自治」を教育目標と決めた。さらに1905年3月の臨時職員会議で成文律撤去が決まった。5月1日の第9回創立記念式において生徒の自治を鼓舞するために以下の演説を行った。

質素・剛健・自重・自治、この四カ条こそ諸子の先輩がつくった校風の結晶である。今日創立十周年を迎えるにあたり、この四カ条のみ残して、他の規則のすべて

を撤去する。そして校内規律の一切を諸子の自治にまかす。これはやがて諸子に対する絶対の信任である。しかし記憶せよ。名誉のうらには責任がある。(『学校編』, pp. 60-61)

札幌農学校ではクラーク博士が“Be gentleman!”<sup>(3)</sup>と言って生徒の自治を尊重した。同様に鶴崎も神戸中学においても札幌農学校のクラーク博士の教えを実践しようとしたのである。

当時全国の中学校では校長や教員排斥等を目的としたストライキが相次いだが、神戸中学では萌芽は見られたが鶴崎の「頓知頓才」が未然に防いだとも記されている。(『学校編』, p. 60)

しかしながら半面、「自治の実際として学校に公認された制裁は制度化し、学校の行事と化すことになった」(『学校編』, p. 72) ことも忘れてはいけない。

## (2) 池田多助 (1883~1964)

池田は神戸中学の3回生であり、1920年に神戸中学教諭嘱託、1924年第2代校長になる。どうやら池田は、神戸中のOBらの運動により神戸中学の校長になったようである。(『同窓会編』, p. 89) 池田の詳細な経歴は『会誌 池田多助先生追悼特集号』(資料2)を参照されたい。

1920年の嘱託の時の身分というのは、関西学院高等部教授にも拘わらず神戸中学で英語を教えていたということである。(『同窓会編』, p. 146)

### ① クリスチャン

池田はキリスト教徒であった。在任中公立中学校では珍しい聖書研究会(通称「光塩会」)ができた。池田校長の承認のもと当時の加藤直三教頭が中心的に指導したと言われている。「光塩会」の命名は池田校長の出身校である広島高等師範学校の同名の会によるとの説もある。(『学校編』, p. 125)

光塩会は、後に本間源一郎らが引き継いだ。生徒の中には、以下の様な回想を残しているものもいる。

光塩会では、本間源一郎先生のロマ書冒頭の講義が今の記憶にのこっている。(略) 同じころ、講演者のお名前は失念したが、罪ある人の更生した劇的な話に感動したことがある。同席の小泉君も感激して、「この話をきいただけで、一中に来た甲斐があった」とまで言っていた。(『神中外史 くすの木の下で』, p. 148)

## ② 戦時中の英語教育

昭和16年太平洋戦争が始まると英語は「敵性語」から「敵国語」となった。全国的な風潮として旧制中学では英語教育縮小の方向にあった。その時局の中でも池田校長は充実した英語教育の維持に尽力した。

当時の校長の池田先生は、日本が将来国威を維持するために必要となるのは英語であるというお考えの下、敵国語と言われる英語に対しても、いささかも教育方針を変えることなく、英語教育を貫かれた。（『同窓会編』，p. 250）

一方で、戦時中の神戸中の校長としての池田の苦悩が窺える回想も残されている。（『同窓会編』，p. 248）

池田校長が子息を予科練に差し出して教え子を守った話は有名だし、現に私は朝礼でこの名校長が「軍人になるばかりが国に尽くす道ではない」と話すのを聞いている。

## ③ パブリックスクールの精神の涵養

池田は在任中の1925年4月～1926年2月までイギリスに留学した。イートン校で3週間寄宿舎に生徒ともに寝食をともにし、イギリスのパブリックスクールの教育の本質に触れた。

池田が理解した英国パブリックスクールの教育とは、第1に宗教教育による精神教育、第2に古典教育による人文的教養、第3に運動による人格形成であった。（『学校編』，p. 101）

後で詳細は述べるが戦前の神戸中学は進学成績だけでなくスポーツの成績（主に野球やサッカー）も全国レベルとなった。

その池田の教育方針がよく分かる回想が『山口県立徳山高等学校百年史』に残されている。

先生は単に学問の講義をするだけでなく、常に人間教育ということを真剣に考えていらっした。先生は自ら投手となり先生方の野球チームを作り、放課後は度々生徒チームと試合をし、生徒との接触を図られた。英語の授業中でも、よく脱線されて、いろいろな話をされた。（略）神戸一中の校長として栄転されたが、先生の転任を聞かされた私たちのショックは大きかった。先生ほどみんなから惜しまれて

去って行った方は、あまりなかったようである。(p.285)

#### 4. 全国有数の進学校

創立直後の神戸中学では進級がかなり厳しかった。明治29年度2年次入学40人が4年後卒業したのはわずか10人(25%)、1年次入学104人が5年後卒業したのが32人(31%)であった。鶴崎校長は、学校の基礎を作るために仕方なかったと述べているが、当時の中学校では落第はよくあることであった。管見の限りでは、甲府中学の場合、明治29年入学者143名が5年後には22名(15.4%)、『百年誌』, p.122)、神奈川中学の場合、明治30年入学236名が31人(13.1%)、『神中・神高・希望ヶ丘高校百年史 歴史編』, p.21)の例もあるので、神戸中学だけが極めて進級率が低かったとは言えないようである。

一方、神戸中学受験者は全国的に見ても多く入学倍率が全国平均と比較しても極めて高かった。しかも優秀な生徒が関西を中心に多く集まったようである。

入学倍率の当時(明治38年~明治45年度)の全国平均は、1.6倍である。、『静中静高百年史』, p.220)同様に、『日本帝国文部省年報第三十二年報』には、明治33年度~明治37年度の全国の中学校の倍率が記されているが、1.57倍~1.71倍である。(p.95)

それらに比べると神戸中学の倍率は極めて高く、明治38(1905)年神戸中学への志願者が616名、合格者95名、倍率は6.5倍(『学校編』, p.96)であった。

1910年代になると、進学成績において全国を意識し始め、私立学校をも含めた数字により、進学者の割合を高めた表を作成し生徒を鼓舞した。、『学校編』, p.77)そして10年を経ずして、神戸中学の進学成績は全国に名を馳せることになった。

当時の様子を英語の教員として勤務した国保護(勤務:大正8年~昭和6年)が以下の様に回想している。

神戸一中の生徒は秀才であつた。教科書丈を教授して居ては物足らぬと云ふ顔付である。それで工夫したのがプリントであつた。(略)これは教科書に関係した熟語、構文等を基礎として、英文和訳、和文英訳の問題を印刷して行つて教室でやる。これには虎が無いから実力養成が出来ると云ふのが私の計画だった。(略)すると間も無く生徒の方がこれに追着いて来る。(略)此の教育現象が神戸一中独特のものであつた様だ。それで一中への入学試験も此轍で、受験者の殆んど全員が満点を取るの、問題を難しくすると其翌年は受験者がそれ位のものは易々と解き得る力をつけ来る。(『同窓會誌 開校四十年周年記念號』, p.22)

また、1919年の卒業生山縣勝見の回想も残されている。

この異様なカーキ色の一色の制服が、東京一中と高等学校入学率一位を競った関係もあって、高等学校などの入学試験場では、神戸一中の生徒は全国から集める中学生の注目の的であり、また畏れられもしたのであった。われわれは心中それを誇りにとしたが、それだけに人一倍勉強もし、また神戸一中の生徒たる体面を重んじた。(『会誌 母校創立80周年記念号』, p.30)

1918年の卒業生の進路の記録が残されているが、この資料によると神戸中学卒業生の高等学校進学率は、東京府立一中を抑えて全国第2位である(資料3)。

## 5. 神戸中学の英語の教師

### 5.1 『学校編』における日本人英語教師

#### (1) 創立当初の英語教師

『学校編』に神戸中学の英語の教員のリストがある(pp.593-594)。開校時にいた英語の教員は、青木兼男、河南休男、秋山鋼太郎、山田政蔵の4人である。青木はわずか半年の勤務である。その後の詳細は不明である。河南は札幌農学校の卒業生(明治26年卒)である。わずか1年の勤務で富岡中学に異動している。秋山は「慶應元年生まれ、同人社、旧東京英語学校予備門、東京大学理学部工学及土木を修め、長崎中学校、三重県第四中学校に赴任」(『神都名家集』p.76)とある。山田政蔵は、池田(1979)に「生駒蕃・山田政蔵(同文館・31)」(p.236)や『西洋料理の栞』(大阪国文社明治40年発行)の翻訳者として名前が見えるが同一人物かは不明である。

大屋八十八郎は創立翌年の明治30年から3年間勤務し、後に明治35年開校の神奈川県立第三中学校の校長になっている。共訳にカーライルの『英雄崇拜論』(丸善出版、明治26年発行)がある。大屋の経歴は、『戸陵百年の歩み(歴史編)』(pp.101-102)に詳しい。得能<sup>フシ</sup>文は明治33年から2年半勤務した。東京高師の教授であり哲学者として多くの著書を残した。今西嘉蔵(1883-1951)は、明治39年広島高師卒業後、神戸中学に明治39年~44年勤務した。(『三田市史』, pp.872-873)彼は『英文和訳和文英訳擬試験問題集』(明誠館、明治44年発行)の共著者であり、受験校としての神戸中学の基礎を築いた。その後エジンバラ大学等に留学し三田中学校の第二代校長になった。稲富栄次郎は昭和4年から2年間勤務した。彼はその後広島高等師範学校講師になり、さらに教授、上智大教授等を歴任、教育哲学の研究者として有名である。彼の経歴は、『教育哲学研究』(第33号, pp.15-22)に詳しい。

次に生徒の回想に現れる英語教員を紹介したい。

## (2) 生徒の回想録に現れる英語教師

### ① <sup>こうさか</sup>上坂 (嵯峨山) 泰次 (1886-1978)

上坂は、明治 41 年から 4 年半勤務した。「神田のリーダーをお習いしたが、高師出の若紳士で、発音が仲々喧しかった。(略) この後たしか京都大学に入り改姓されたのではなかったろうか」(『同窓会編』, p. 108) との回想が残されているが詳細は不明である。ただ、『英語発音法と綴字法』(健文社, 昭和 9 年発行) や『英語音韻論』(三省堂, 昭和 17 年発行) の著作が残されているので英語音声学の研究者であったようだ。後に高松高商に勤務し大平正芳(第 68・69 代首相)を教えている。

### ② 松村保成

松村は、昭和 4 年から昭和 20 年まで勤務した。「It is ナンナン that ナンナン……ちゅうのは強調構文だ」(『同窓会編』, p. 242) が口癖で、松村のあだ名は「ナンナン」であった。彼は生徒に暗唱を課する厳しい教員ではあったが、快刀乱麻の文法の授業に酔いしれ英語の虫になったと宮内猛(44 回生)は回想している。(『同窓会編』, pp. 242-243)

松村に関しては他にも多くの生徒の回想が残されている。

松村先生は高学年で英語を教えていただくまでは、私にとっておそろしい存在であった。(略) 英語の御授業は、油断すると「出て来い」とやられるのがおそろしかったが、実に内容の豊富なものであった。英作文ではまず文脈の正確さを強調され、読解では構文に重点をおかれた。それ以上に思想的なお言葉があって、感銘を受けることが多かった。Utopia が語源的には nowhere であると板書して説かれた時のショックは忘れられない。(『神中外史 くすの木の下で』, p. 112)

筆者が驚いたのは英作文の授業で文脈の正確さを松村が指導していることである。今でいえば discourse の指導ということであろうが、高等学校での英作文の試験と言えば和文英訳が主流であった当時、談話指導までも行っていた日本人英語教師がいたとは驚きである。

松村は、その後、赤穂中学校長、小野高校長、洲本高校長を歴任した。

### ③ 亀井万三郎・毛利<sup>よしのぶ</sup>可信

冒頭で卒業生の代表の一人として紹介した國弘正雄は、恩師のことを以下の様に回想



している。

幸い英語科の主任、亀井万三郎先生は若き日をニューヨークはコロンビア大学で修業した苦学力業の士で、大いに理解があった。しかも、東大の英文を了え、シンガポールで英軍相手の通訳の経験もゆたかな若い先生が近く赴任されるからぜひ顧問をお願いするように、と助言してくださった。

この若い先生というのは毛利可信（1916-2001）である。亀井の口添えて國弘が中心となって復活させた ESS の顧問を引き受けた。毛利は後に大阪大学の教授になり、英語学者として『英文法の知識』（研究社、昭和 31 年発行）など数々の著書を出版した。

#### ④ 三浦和一・増村繁治郎

受験王国神戸中学の成立に寄与した教員として生徒が回想しているのは、三浦和一（勤務：1916 年～1921 年）と増村繁次郎（勤務：1913 年～1924 年）である。

三浦に関しては以下の回想が残されている。

現在我国外交界の中堅として活躍しておられる先生は、恐らく間違つて高等師範に入られたのであらう。その教授振りに於ても断然尖端を歩いて居られる様であつた。フォネチックサインを用ひて正しい発音を教へて居るのは、我が神戸一中を加へて全国に二校あるのみ。（『同窓會誌 開校四十年周年記念號』，p. 130）

三浦は大正 5（1916）年広島高等師範学校英語部卒である。一方で文官高等試験合格者一覧には、京大法学部卒<sup>(4)</sup>とある。広島高等師範を卒業後、神戸中学に勤務、退職後京都大学に入学、大正 13 年 1 月文官高等試験に合格したと思われる。三浦は、後に『外交の英語』（研究社、昭和 52 年発行）を著している。三浦は神戸中学勤務時代、日本が誇る名優、志村喬（23 回生 1921 年卒）兄弟と同じ下宿にいたということである<sup>(5)</sup>。また、増村に関しても以下の回想が残されている。

増村繁治郎先生は（略）謹厳そのもののような先生であつたが（略）英語の教科書として“タクト アンド プリンシプル”という本が使われたが、これによって必要な単語は完全にマスターし得て、入学試験のときなど、英語の問題でまごつくことはなかつた。（『会誌 母校創立 80 周年記念号』，p. 32）

増村は後に第 9 代洲本中学校校長（大正 13 年 3 月～昭和 2 年 3 月）になった。二人

の有能な英語教員を有した神戸中学の質の高い英語教育への感慨と自負が満ち溢れた回想である。

#### ⑤ 福岡法重

同様に受験王国を築いた日本人英語教師として最後に紹介したいのは、福岡法重である。彼は大正 11（1922）年広島高等師範学校文科二部の卒業である。彼の神戸中学勤務は、昭和 6（1931）年～昭和 15（1940）年である。福岡の薫陶を受け東大医学部に入学した三村は以下の様に回想している。

福岡先生の英語は厳格な発音の御指導からはじまった。発声に関係のある器官の正確な断面解剖図をプリントされ、医学用語の通りそれを暗記し、ついでその用語を用いて一つ一つの音の出し方が説明できなければ叱られた。今でも患者を診察して口の中をみる時、そのプリントの図と用語を思い出すことがある。それほど詳細で正確なものであった。

それから五年間、先生は夥しいプリントをすって私たちに下さった。（略）大部の参考書が出来るほどの分量であった。これはとても並の教師が出来ることではなかった。しかも常に端正な文字で美しく書かれていた。若さと共に教育的情熱なくしては出来ないことであったと思われる。（『神中外史 くすの木の下で』, p.112）

福岡の広島高師在学中には、イギリスで H. Sweet 博士の元で音声学を学んできた杉森此馬がいた。福岡の厳密な発音指導の授業には杉森の影響が考えられる。

福岡の作成したプリントの一部を掲載する（資料 5）。福岡がその後これをまとめて受験参考書を出版したかは定かではないが、内容はとても充実しており受験王国神戸中学の英語教育の充実に大いに寄与したと思われる。

## 5.2 外国人英語教師

神戸中学の英語教育は上位の学校への受験対策だけに行われていたわけではない。開校当初から外国人教師を雇用して Speaking や Listening 指導にも力を入れていた。

ただ、『学校編』や『同窓会編』、『神中外史 くすの木の下で』など生徒の回想録には外国人英語教師についてはあまり言及されていない。

### (1) 外国人教師の授業の特徴

英会話の授業の時間割が残されている（資料 6）。これによると、2 年～4 年次に外国

人教師の英会話の授業が行われ、日本人英語教師が通訳として付き添う、いわゆる Team Teaching 形式の授業が行われていたことが分かる。管見の限り、山口県の岩国中学（保坂，2012，p. 41）など1年次に英会話の授業を行ったり，4，5年次<sup>6)</sup>に行ったりするが多い。安積中学のように全学年で外国人講師の授業があることも珍しいが，神戸中学の様に1年次と5年次以外は外国人教師の英会話の授業があったというのは極めて珍しいと思われる。推測するに1年次ではそれほど豊かな英語でのコミュニケーションは期待できなかったであろうし，5年次は上級学校の入試に向けて時間的な余裕がなかったのではないか。

## (2) 外国人教師

### ① R. J. Inglott (1871-1950)

神戸中学が最初に雇った外国人教師は，R. J. Inglott である。鶴崎校長の意向で外国人教師の採用となったが，その経緯は前述したとおりである。緒方（1973）に Inglott の略歴が残されている（資料7）。また，彼が女優中山エミリの曾祖父にあたることからNHKが2015年7月31日に放送した番組「ファミリーヒストリー 中山エミリ〜ルートは地中海・マルタ島 日本への帰化」で来日の詳細等を知ることができる。

Inglott はマルタ島出身のイギリス人である。両親が亡くなってオーストラリアへの移住を決意した。その途中で寄ったインドのボンベイで，日本で英語教師を求めているという話を聞き来日，3年間鹿児島県の造士館中学で英語を教える。それから身辺整理のため一時マルタ島に帰国するが，1903年に来日し神戸中学や御影師範学校で英語を教えた。緒方（1973）によると東京で知り合った大倉本澄の紹介ということになっているが，最初に勤務した鹿児島県の造士館中学の校長，岩崎行親が札幌農学校の二期生であり鶴崎校長と同期であったことも採用の理由であったと予想される。

彼の授業に関しては，「アールゼー，イングロット先生（英語），そのゼスチュアは俳優のやうだった。」（『同窓會誌 開校四十年周年記念號』，p. 57）との回想が残されている。彼はその後，岡山商業学校，拓殖大学等で勤務し日本の英語教育の発展に寄与した。岡山に在住中に教会で知り合った中山安乃と結婚し，1941年日本国籍を取得している。

第56・57代総理大臣の岸信介は，「中学に入ると間もなくイングロットと言う英国人の先生の処へ一週に二回位英会話の稽古に通うこととなった」（『我が青春』，p. 54）と書き残している。イングロットが岡山に在住中に3年以上英会話を習ったらしい。

なお Inglott は，孫の緒方英穂との共著で，*A dictionary of English homonyms: pronouncing and explanatory*（丸善出版，昭和17年発行）を出版している。

## ② C. B. K. Argall (資料 8)

神戸中学には、1912. 4-1914. 8, 1917. 10-不明と2度勤務している。英語の授業で生徒を魅了したという回想もあるが、『校友会報』等によれば、サッカーのコーチとして貢献も大きいように思われる。

先生は英国人にしては小柄で其背丈は我々と大差無かった。然し見るからにスマートで動作もキビキビしていたし、其上英国人は独特のディグニティにより近づき難いものだが、先生はいつも快活明朗で、教室で聞く先生の口から流れるように出て来るイングリッシュは天来の妙音のように我々を魅了したものであった。(略) フットボール部を置こうじゃないかと五年の連中は続々練習に参加した。(『同窓会報』第4号, p.15)

同様に、以下のような回想もあり、サッカー王国神戸中の基礎を作った Argall の貢献は大きかったと思われる。詳細は後述するが、サッカーの練習試合を居留地の外国人チームとしばしば行っており、サッカーというスポーツを通じて英語力の向上にもつながったと思われる。

思えば我々はアーガル先生によって地に蒔かれた種子であった。それが芽生え育って力強く成長し、曾てはサッカー王国を実現し、更に海外に迄雄飛する程の逞しき発展を遂げたのである。(『同窓会報』第4号, p.16)

Argall は、他に、岡山商業学校に大正5年4月10日から大正6年9月まで勤務、神戸高等商業学校に大正7年～9年、大正10年～昭和3年、勤務している。

妻の Mary も岡山商業学校や神戸の小学校で英語を教えている。以下の記述にもあるように、小学生に英語を教えるだけでなく、職員研修にも貢献している。

- 一、大正7年4月30日、木日 高等科児童ニシテ英語発音教授ヲ受ケ度キ希望ヲ 昼食後及放課後ノ二回ニ講堂ニ集メ芥川校長ヨリ一場ノ話アルタリ。
- 一、同6月26日、職員有志ノ英語練習会を開ケリ。
- 一、同7月5日、本日父兄会第五日開催、来校ノ父兄ニハ、アーガル夫人指導ノ英語発音教授ノ實際ヲ参観セシメタリ。(『神戸小学校五十年史』, p.875)

明治後期から昭和初期にかけて高等小学校で英語が教えられた様子は、江利川(2006)が詳しい。が、外国人教師が教えた例は、管見の限り、エルマー夫人(『深志百

年』, p. 24) やジェームズ・フーバーが横浜の小学校で教えた例 (『横浜市教育史』上, p. 44), 岐阜のチャペルの例 (『岐阜百年史』, p. 114), J. ダンロップが浜松高等小学校で教えた例 (『英学風土記』, p. 387) などあるが, 職員研修の記録は極めて珍しいと思われる。

③ **Hubert Langley (勤務: 1914. 9-1917. 9)**

Langley に関しては神戸中学関係では資料を発見できなかった。保坂 (2017) によると, 神戸中学赴任以前は, 豊浦中学 (勤務: 1912 年 11 月~1914 年 8 月) に勤務していた。その後, 藤本 (2008) によると, 大阪商科大学 (勤務: 1928 年~1935 年), 予科 (勤務: 1929 年~1940 年), 高等商業部 (勤務: 1930 年~1940 年) にも勤務している。

④ **Thomas Satchell (1867-1956) (勤務: 1918. 4~不明)**

Satchell に関しては, 神戸中学関係では詳細な資料は残されていない。以前, 勤務していたと思われる新宮中学には, 大正 3 年, 和歌山県巡回教師として訪問, 「サッチェルさんは神戸クロニクル紙の主筆といふ経験をもった博識の英国人」 (『新高八十年史』, p. 203) であった。

彼に関して, 神戸居留地研究会にメールで問い合わせたところの谷口良平氏より以下のような回答<sup>7)</sup>を得た。

- ・出生・洗礼記録, 結婚記録, 死亡記録。
- ・1871 年, 1881 年, 1891 年の国勢調査 (UK Census) 記録。
- ・ロンドン大学卒 (らしい)。(カレッジ名不詳) その学籍簿と成績表。
- ・1898 年来神 (らしい)。パスポート発給記録。
- ・和歌山市, 新宮市, 姫路市の公立学校に奉職した (らしい)。
- ・太平洋戦争中, 敵性国民として日本国内のどこかに抑留されていた可能性。

また, 谷口氏から神戸市立外国人墓地の Satchell 家族の墓碑の情報も教えて頂いた。それによると, T. Satchell は, 1867 年 2 月 3 日ロンドン生まれである, 妻は SUZU で, 1890 年横浜生まれ, 娘 Alice は 1914 年 10 月 3 日和歌山生まれ, 1940 年 2 月 3 日海上で死すとある。

なお谷口氏によるとオーストラリア国立国会図書館所蔵のハロルド・S・ウィリアムコレクションの中に神戸在住の英国人に関する資料が多数あり, その中に Satchell に関する資料もあるということである。筆者は未見であり次回の研究課題としたい。

⑤ **John Kerr Goldie (勤務: 1925. 4-1930. 3)**

『学校編』, 『同窓会編』に授業の記述が残っているのは, J. K. Goldie だけである。

2年時 1927年4月～28年3月

2月4日 第2組 当番日誌 抄録（略）

第5限 英語会話 ゴールディ先生（略）先生がはいってこられたので、みんなしづまった。まづ、級長が出席をとる。それから、リーダーを読む。けふの設問は“What do you think about the coming general election?”だった。畠中君が「なんにも知りません」と答へたら、先生が黒板に「アホ」と書かれたので、みんな「笑った。（『学校編』, pp. 108-109）

他にも、英語会話の授業といいながら、日本で現在、天皇以外の偉大な人物を生徒に質問したりしており、いわゆる単なる簡単な英会話の授業ではないようだ。まず、リーダーを読むことから始める。その内容にふさわしい関連の質問を生徒にするといった形式で授業が行われていたようである。

Goldie に関しては『北野百二十年史』（p. 137）に以下の記述が残されている。

1926（大正15）年4月以来、（注：1940年まで）毎週6時間ずつ2年生の英会話を担当してきたゴールディ（John Kerr Goldie）が、戦局急を告げるにつれて、「スパイ」「桃色教師」などの汚名を着せられて十三橋警察署の取り調べを受け、公立学校の教師を辞職するように迫られたり、野尻湖にあった別荘を没収されたりなど、圧迫が日増しに強くなって来たので辞職。（略）彼は、1894年生れ、スコットランドのアカデミー（アーウィン・ロイヤル・アカデミー）を卒業し、アメリカ船の高級船員として1926年来日。日本をより良く知るためにそのまま芦屋に居を定め、北野中学・豊中中学・茨木中学・神戸一中で教えた。北野中学での15年間は一日も欠勤したことのない精励ぶりであった。

これによれば、Goldieは、来日早々、神戸中学で英語を教え始めた。2年目からは、北野中学でも兼務で英語を教え始めた。大阪では他に、富田林中学でも昭和10年から14年まで教えている（『富田林高校百年史』, p. 727）。

#### ⑥ その他の外国人教師

『学校編』には、在職教職員一覧が載っている。そこには、上記の他に、マリオン・ケットウェル（p. 594）と クロード・ヴェーン・ロッシ（p. 594）の名前が見られる。前者は全く詳細が不明である。後者のロッシに関しては、昭和6年～昭和16年、水戸高等学校に勤務している（『水戸高等学校史』, p. 989）こと以外は不明である。近くの伊丹中学に、ミ・ヴィ・ロスが大正13年4月～昭和4年3月まで勤務した記録（『伊丹

高校百年史』, p.334) があるが、同一人物か確証は得られていない。

## 6. スポーツを通じての外国人との交流

神戸中学の特色として、居留地の外国人のクリケットのチームや、サッカーのチームとの交流が挙げられる。

### (1) 野球部

神戸中学野球部は、明治29年の創立で、明治33年には外人チームと対抗戦を行い、市内に野球ブームをもたらした。(『同窓会編』, p.400) 1919(大正8)年には「全国中学校野球大会」に出場し、長野師範を決勝戦で破り全国制覇を果たしている。その後1924(大正13)年に池田が二代目校長に就任すると、神戸中学の黄金時代が築かれた。

その野球部の創立当初に神戸居留地の外人との対抗戦の様子が、『校友会誌』にたびたび掲載されている。(『校友会誌』第二号, 第四号, 第五号)

神戸中学、野球を創めてより既に十年、居留地外人クリケット倶楽部と、技を戦はず事六春秋、回を重ねる事、拾有五度に上り、今や関西野球界の両雄を以て見做され、其力量亦た伯仲の間にありと称せらる。(『校友会誌』第十二号, p.27)

年2回春と秋に居留地の外国人クラブと対抗戦を行っていたようである。いつまで続いたかは定かではないが、発足から10年で15回とはかなりの数である。試合後の交流の記録は見つけられていないが、英語で交流が行われたと考えるのが普通であろう。

### (2) サッカー部

大正2年(1913年)にサッカーを知っている岩田久吉(広島高師卒・数学教員)が学校にやってきて鶴崎校長の指示で蹴球部ができた。当初は、野球部の付属という形であった。冬は野球部の練習を止めにして蹴球をしていた。時には柔道部の生徒も参加していた。

Argall 英会話教師がコーチとしてルールを教える一方、神戸外人クラブと試合を重ねて成長して行った。(『同窓会編』, p.402)

昭和7年池田校長の時、新進気鋭の河本春雄(体育教員)が着任、11年間で全国的な大会で9回優勝するなど黄金期を築いた。

サッカー部の野球部同様、Argall コーチや外人クラブとの交流で部員は英語を使ったと考えられる。

## 7. ま と め

戦前の神戸中学は鶴崎、池田二人の校長の強いリーダーシップの下、西日本を代表する受験校となった。鶴崎校長は札幌農学校の経験から外国人教師を雇用し単なる初級英会話のレベルではなく英語で議論できるまで生徒の Speaking 能力, Discussion 能力を高めようとした姿勢がうかがえる。二代目校長の池田も英語教育の充実に尽力した。この二人の校長が中心となって戦前の神戸中学の充実した英語教育, 受験王国は築かれていった。

日本人英語教員の多くは若い時に神戸中学で研鑽を積み、その後、様々な方面で活躍した。同様に、外国人教師も若い時に神戸中学に勤務し、その後、関西を中心に日本の学校で英語を教える者が多かった。

### 謝 辞

本研究は神戸高校の永田實氏の協力なくしてはありえなかった。永田氏は、神戸高校 17 回卒 (1965 年卒) でかつて母校の社会科の教員を務め、現在も校史記念室・校史編纂室担当をされておられる。彼の元に足掛け 10 年、10 回以上は通った。そこで神戸中学の資料だけでなく日本の高校の多くの年史を拝見できたことが本研究のまとめにつながった。また、T. Satchell に関しては、神戸居留地学会の谷口良平氏の情報が大いに役立った。ここで改めてお二人に感謝したい。ありがとうございました。

### 《注》

- (1) 神戸中学の正式な校名の変更は『学校編』(p. 67)によると、兵庫県神戸尋常中学校 (1896-1899), 兵庫県神戸中学校 (1899-1901), 兵庫県立神戸中学校 (1901-1907), 兵庫県立第一神戸中学校 (1907-1948) となる。本論文では旧制の場合、すべて通称名で神戸中学と記す。それは読者の混乱を避けるためである。
- (2) 『神戸高校百年史 — 学校編』や『神戸高校百年史 — 同窓会編』は度々引用しているので、以後それぞれ『学校編』と『同窓会編』と略す。詳細な書誌情報は参考文献で確認して欲しい。
- (3) クラークの名言 “Be gentleman!” は度々引用されている (名和, p. 2)。しかし、文法的には “Be gentlemen!” が正しいのではないかと思う。
- (4) 三浦和一の文官高等試験合格に関しては、<http://kitabatake.world.coocan.jp/rekishi/25.2.html> を参照した。学歴は京大法学部卒とある。
- (5) 瀬戸本淳「連載 神戸秘話② 日本が誇る名優 志村喬と政子夫人」Retrieved from <https://kobecco.hpg.co.jp/33747/https://kobecco.hpg.co.jp/33747/>
- (6) 筆者の有するわずかな資料では、川越中・小樽中・土浦中では 5 年次のみ、札幌中では 4, 5 年次のみ外国人講師が教えている。一方、山口県の岩国中学では、1 年次に外国人講師に英会話を習ったと末川博は証言している (保坂, 2012, p. 41)。
- (7) 筆者は神戸居留地学会の HP から問い合わせを行った。2018 年 12 月 8 日に本文中にある内容のメールが届いた。



主要参考文献

- 池田哲郎 (1979). 『日本英学風土記』 篠崎書林.
- 江利川春雄 (2006). 『近代日本の英語科教育史 職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』 東信堂.
- 大阪府立北野高等学校校史編纂委員会 (編) (1973). 『北野百年史』 北野百年史刊行会.
- 大阪府立北野高等学校創立 120 周年記念誌編集係 (編) (1993). 『北野百二十年』 大阪府立北野高等学校/六稜同窓会創立 120 周年記念事業委員会.
- 大阪府立富田林高等学校 (旧富中) 100 周年記念事業実行委員会記念誌委員会 (編) (2002). 『富田林高校百年史』 大阪府立富田林高等学校 (旧富中) 100 周年記念事業実行委員会.
- 緒方登摩 (1973). 『外人教師 Roger Julius Inglott』 英研社.
- 岡山県立岡山東商業高校「岡山東商百年史」編集委員会 (編) (1999). 『岡山東商百年史』 岡山県立岡山東商業高校創立百周年記念事業実行委員会.
- 開校五十周年記念式典会 (編) (1935). 『神戸小学校五十年史』 開校五十周年記念式典会.
- 神奈川県立希望ヶ丘高等学校百周年実行委員会編纂局 (編) (1998). 『神中・神高・希望ヶ丘高校百年史 歴史編』 神奈川県立希望ヶ丘高等学校創立百周年記念事業合同実行委員会.
- 岐高同窓会 (1973). 『岐高百年史』 非売品.
- 岸信介 (1983). 『我が青春』 廣濟堂出版.
- 神戸高商編集部 (編) (1926). 『丘人』 18 号, 大正 15 年 6 月 25 日刊.
- 三田市史総務部総務課市史編さん担当 (編) (2007). 『三田市史』 第 6 卷, 近代資料Ⅱ, 三田市.
- 静中静高百年史編集委員会 (編) (1978). 『静中静高百年史』 上巻, 非売品.
- 「新高」八十年史編纂委員会 (編) (1983). 『新高八十年史』 和歌山県立新宮高等学校同窓会.
- 『戸陵百年の歩み』 編纂委員会 (編) (2003). 『戸陵百年の歩み (歴史編)』 神奈川県立厚木高等学校創立百周年記念事業実行委員会.
- 名和豊春 (2016). 「グローバルゼーションと工学教育: Be Gentleman!」 『工学教育』 64(6), p. 2.
- 日本近代教育史事典編集委員会 (編) (1971). 『日本近代教育史事典』 平凡社.
- 兵庫県教育史編集委員会 (編) (1963). 『兵庫県教育史』 兵庫県教育委員会.
- 兵庫県史編集委員会 (編) (1967). 『兵庫県百年史』 兵庫県.
- 兵庫県立伊丹高等学校創立 100 周年記念史編集委員会 (編) (2002). 『兵庫県立伊丹高校 100 年史』 兵庫県立伊丹高等学校.
- 深志同窓会『深志百年』 刊行委員会 (1978). 『深志百年』 深志同窓会.
- 藤本周一 (2008). 「戦前昭和期に大阪府の学校等 (旧学制) に勤務した外国人教師について (その 3・完)」 『大経大論集』 第 59 巻第 1 号, pp. 101-115.
- 保坂芳男 (2012). 「H. D. Leland に関する研究: 岩国中学での教育活動を中心に」 『日本英語教育史研究』 第 27 号, pp. 31-49.
- 保坂芳男 (2017). 「豊浦中学の英語教育に関する研究 — 外国人教師に焦点を当てて」 『人文・自然・人間科学研究』 第 37 号, pp. 75-90.
- 毎日新聞横浜支局 (編) (1968). 『神奈川の百年』 下巻, 有隣堂.
- 三谷敏一 (編) (1901). 『神都名家集』 大竹堂.
- 水戸高等学校同窓会水戸高等学校正史編纂委員会 (編) (1982). 『水戸高等学校史』 水戸高等学校同窓会.
- 三村文男 (1988). 『神中外史 くすの木の下で』 非売品.
- 文部大臣官房文書課 (編) (1906). 『日本帝国文部省年報第三十二年報』 文部大臣官房文書課.
- 山口県立徳山高等学校百年史編纂委員会 (編) (1985). 『山口県立徳山高等学校百年史』 山口県立徳山高等学校.

山梨県立甲府第一高等学校同窓会（編）（1992）.『百年誌』山梨県立甲府第一高等学校同窓会発行.

横浜市教育委員会（編）（1978）.『横浜市教育史』上，横浜市教育委員会.

#### 神戸中学・高校関係（発行年順）

金子久太郎（編）（1901）.『同窓會誌』第二號，明治三十四年七月十八日，非売品.

金子久太郎（編）（1902）.『同窓會誌』第四號，明治三十五年十一月十五日，非売品.

牧野好春（編）（1902）.『同窓會誌』第五號，明治三十六年六月二十八日，非売品.

松島與三郎（編）（1906）.『同窓會誌』第十二號，明治三十九年十二月十九日，非売品.

多留政之助（編）（1939）.『同窓會誌 開校四十年周年記念號』第八十號，昭和十四年七月二十日，兵庫県立第一神戸中学校校友會.

社団法人兵庫県立神戸高等学校同窓会（編）（1963）.『同窓会報』第4号，社団法人兵庫県立神戸高等学校同窓会.

社団法人兵庫県立神戸高等学校同窓会（編）（1965）.『会誌 池田多助先生追悼特集号』第6号，社団法人兵庫県立神戸高等学校同窓会.

社団法人兵庫県立神戸高等学校同窓会（編）（1976）.『会誌 母校創立80周年記念号』第17号，社団法人兵庫県立神戸高等学校同窓会.

神戸高校100年史編集委員会（編）（1997）.『神戸高校百年史——学校編』兵庫県立神戸高等学校創立百周年記念事業後援会.

神戸高校100年史編集委員会（編）（1997）.『神戸高校百年史——同窓会編』兵庫県立神戸高等学校創立百周年記念事業後援会.

（原稿受付 2019年6月25日）

資料1 鶴崎久米一校長の略歴（『学校編』，p.24）

長崎県高来郡北諫早村大字下本明村小字深山 士族 鶴崎辰次 次男 鶴崎久米一  
安政六年 五月二十日生

- 一 慶応三年字上ノ山 橋本嘉平（叔父）私塾ニ入り習字及漢学ヲナス
- 一 明治元年字金谷窪木村 木村惣左衛門私塾ニ転ジ漢学及ビ習字ヲ修ム側ラ深山ノ人 田中検助ニ就キ漢学修業
- 一 明治三年ヨリ同四年ニ渡リ諫早藩立学館ニ入り漢学ヲ修ム
- 一 明治四年ヨリ同五年ニ渡リ佐賀県大字多良村小字糸岐（？）村 石井佐馬之助私塾ニ入舎漢学ヲ修ム
- 一 明治六年諫早学館ニ入舎 漢学を修メ傍ラ柔道ヲ習フ
- 一 明治六年ヨリ同七年ニ渡リ右同所ニ於テ英語筆算ヲ修メ後珠算ヲ兼修ス
- 一 明治七年長崎医学校ニ入り独逸学ヲ修ム
- 一 明治七年秋ヨリ同年八月字清泉寺 浦地弥太郎私塾ニ入舎シ漢学ヲ修ム
- 一 明治八年八月長崎英学校ニ入学ス
- 一 明治十年四月上京東京神田錦町英語私塾ニ入ル
- 一 明治十年七月二十七日札幌農学校官費生徒申附候事（但シ月俸十六円） 札幌農学校
- 一 明治十五年四月二十六日昨年各地蝗害駆除方格別尽力候ニ付為手当金円被下候事 開拓使残務取扱所
- 一 明治十五年七月学位状ヲ受領ス



図1 鶴崎久米一校長

資料2 池田多助先生略歴（一部略）

（『会誌 池田多助先生追悼特集号』第6号，p.7）

- 明治16年 11月25日三重県伊勢市にて出生  
 35年 兵庫県立神戸中学校卒業  
 39年 広島高等師範学校本科英語部卒業  
 45年 京都帝国大学文科大学英文学学科卒業  
 明治39年 広島高等師範学校助教諭  
 41年 兵庫県立第二神戸中学校教諭  
 大正元年 山口県立徳山中学校教諭  
 4年 関西学院高等部教授 同校生徒監  
 9年 兵庫県立第一神戸中学校教諭嘱託  
 9年 大阪府立第十二中学校（現生野高校）校長  
 （写真は同上，p.4）兼教諭  
 13年 兵庫県立第一神戸中学校校長  
 昭和2年 兵庫県中学校野球連盟理事  
 8年 兵庫県立第二神戸商業学校校長事務取扱兼任  
 13年 兵庫県中等学校英語学会長  
 20年 兵庫県立第一神戸中学校校長を退職  
 20年 甲南高等女学校校長  
 29年 甲南女子短期大学長  
 33年 甲南女子短期大学長兼甲南女子高等学校校長および甲南女子中学校校長を退職



資料3 全国屈指の進学校（『学校編』，p.77）

1918年3月卒業，19回生の成績

中学校名	卒業生数	高等学校入学者	百分比
東京第四	108	80	74.0
神戸第一	118	60	50.8
東京第一	147	73	49.6
広島第一	90	37	41.1
鹿児島第一	115	45	38.1
横浜	96	33	34.3
山口	89	27	30.3
岡山	119	35	29.4
天王寺	91	26	28.5
長崎	88	25	28.4



資料6 大正八年度職員担当学科及主任一覧（一部のみ抽出）

（『校友會誌』第四十二號，p. 120）（二重下線は筆者）

補習科	5年	4年	3年	2年	1年	氏名
英語	英語 T	<u>外人附添</u>				増村繁治郎先生
			<u>外人附添</u>		英語 L 英習字	指原好雄先生
				英語 L		
				<u>外人附添</u>		飯久保直雄先生
		会話	会話	会話		トーマス サッチェル先生

資料7 R. J. Inglott 年表（緒方，1973，pp.9-10より作成）

1871年	5月5日 マルタ島，バルダラ町で Peter Pearl と Antoinnett Ruggier の5男として誕生。5男7女の12番目
1884年	医者をめざしマルタ大学予科入学
1890年	ロンドン大学入学（犯罪心理学専攻）
1893年	ロンドン大学卒業
1894年	イタリー，トリノ大学英語教師となる。
1896年	6月来日。正則英語学校で教鞭をとる。原敬と知り合う。
1867（ママ）年	上京中の加納鹿児島県知事と岩崎行親鹿児島一中校長と知り合い，両氏の要請によって同年設立の鹿児島県造士館中学外人教師として赴任。鹿児島ではじめてクリケットを紹介。
1900年	一身上の都合で帰国
1903年	再び来日。前回の来日中に知り合った大倉本澄（後甲南高校教授）のすすめで神戸一中，御影師範で教鞭をとる。
1905年	岡山商業学校の外人教師になる。同時に六高，金光中学，高梁中学にも出講。岡山在任中にオペラ歌手三浦たまきと知り合い，又六高の外国人教師であった Guntlette（ママ）氏との親交を深める。
1906年	松江の旧藩士中山市太郎の長女安乃と結婚。
1907年	長男 William 誕生
1908年	次男 Edward 誕生
1911年	長女 Elizabeth 誕生
1914年	三男 George 誕生
1915年	七高外人教師として再び鹿児島に赴任。同時に鹿児島高等農林でフランス語，イタリー語を教える。
1927年	天理外国語学校外人教師となり奈良に移住。帰国中のエルダー氏の代わりに三高に出講（1928）
1929年	舞鶴の海軍機関学校外人教師になる。
1939年	拓殖大学外人教師となり東京に移住（42年に辞任）
1941年	日本国籍取得
1947年	山口経済専門学校外人教師となり英会話を教える。
1950年	心臓発作により死去，山口市郊外湯田のカトリック墓地に葬られる。

資料8 Argall先生の似顔絵(『丘人』18号)

